



2010年6月23日刊 岩波書店

著者からのメッセージ

米国のサブプライム問題に端を発し、リーマンショックで頂点に達した世界経済の動揺は、各国政策当局の懸命な努力によってようやく沈静化したが、金融・財政を学ぶものにとって、今回の経験が残した問題は大きい。これまで正統とされてきた、伝統的な思考方法・理論体系に大きな疑問符が付くようになったためである。金融政策の分野では、いわゆる「非伝統的金融措置」なるものをどう考えるべきかという問題が提起されている。財政政策の分野では、しばしば「ケインズの復活」が唱えられているが、それはどういう意味

なのかを改めて考えてみる必要がある。いずれの分野においても、伝統的なパラダイムの転換が求められているわけであるが、今回の経験を踏まえた新たな理論体系の再構築はどのようにして可能か。本書を貫く問題意識はこのように要約される。

このように記すと、何か難しい論文集のような印象を持たれるかもしれないが、本書は決してそのようなものではない。専門外の読者でも、エッセイ風の本文に散りばめられた数々のエピソードを辿って行くうちに、知らず知らずのうちに金融財政論議の最先端にたどり着いている、そのようになることを願って執筆したつもりである

目次

はじめに

第1部 金融政策と資産価格バブル——「グリーンスパン責任論」を考える

第1章 2005年 グリーンスパン賛歌

- 1 ジャクソンホールでのシンポジウムにて
- 2 「グリーンスパン時代」の総括
- 3 住宅価格バブルについての認識と政策対応

第2章 2006年 グローバリゼーションの進行と資産価格の変動

- 1 世界経済の安定化と資産価格の大幅変動
- 2 グローバリゼーション時代における長期金利の動き

第3章 2007年 住宅問題の深刻化

- 1 金融政策と住宅価格バブルとの関係
- 2 スウェーデン中央銀行の新たな試み
- 3 テイラー・ルールによる検証

第4章 2008年 金融危機から実体経済の危機へ

- 1 中央銀行の危機対応に対する批判
- 2 金融危機における短期金利操作の再評価

第5章 2009年 危機の回避

- 1 世界経済の現状
- 2 資産価格と金融政策との関係再考
- 第6章 総括 どのような教訓が得られたか

第II部 危機における金融財政政策——「非伝統的」金融措置を考える

- 第1章 伝統的金融政策とは何か
 - 1 マネーサプライ・ターゲティング時代を振り返る
 - 2 伝統的金融政策運営の場——短期金融市場の構造と金利操作
- 第2章 非伝統的金融措置とは何か
 - 1 非伝統的金融措置は「政策」か
 - 2 非伝統的金融措置の先駆——日銀の量的緩和政策
 - 3 非伝統的金融措置に関するバーナンキの見解
 - 4 現行非伝統的金融措置の概要
 - 5 非伝統的金融措置の特徴
- 第3章 非伝統的金融措置の評価
 - 1 量的緩和か信用緩和か
 - 2 中央銀行のバランスシートの拡大
 - 3 中央銀行の資産内容の変化
 - 4 流動性概念の再検討
- 第4章 非伝統的金融措置の国際的側面
 - 1 危機脱出策としての為替政策
 - 2 危機に際しての国際協調
- 第5章 危機における財政政策の発動
 - 1 財政政策の効果をめぐる議論の変遷
 - 2 非伝統的金融措置としての財政政策
 - 3 危機対応と財政健全化との関係——国債増発をどう考えるか
 - 4 政府紙幣の発行をめぐる議論
- 第6章 金融監督規制体制の整備をめぐる諸問題
 - 1 金融監督規制体制整備の現状
 - 2 中央銀行と金融監督規制との関係
- 第7章 「出口」を求めて
 - 1 出口政策に関する G20 の考え方
 - 2 米国の出口政策をめぐる議論
 - 3 日本の出口政策
 - 4 おわりに

参考文献

索引